様　式　Ｃ－１９、Ｆ－１９－１、Ｚ－１９　（共通）

科学研究費助成事業　　研究成果報告書

平成 ３０ 年　 ６ 月 ２７ 日現在

機関番号：２３３０１
研究種目：基盤研究(C)（一般）
研究期間：2014～2017
課題番号：２６３７０１６６

研究課題名（和文）日本・中国のインスタレーション作品に見られる東洋古典園林的要素に関する実証的研究

研究課題名（英文）The empirical study on Oriental classical garden elements found in installation works in Japan and China

研究代表者
高橋　治希（takahashi, haruki）

金沢美術工芸大学・美術工芸学部・准教授

研究者番号：１０４６４５５４

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費）　　2,500,000円

研究成果の概要（和文）：　同じ空間表現である日中古典園林と西洋美術の文脈によるインスタレーションについて、文献調査や園林の現地調査、作家インタビュー、作品制作発表を通して研究した。その中で園林は切り取られた空間の中で、時間と空間が渾然一体化し、森羅万象の些細な変化に自身の情感を見出す内側に向けた表現であることに対し、インスタレーションは切り取られた時間の中で、仮設性やハプニングを含みながら眼前の出来事や社会システムを問う等、外に向けて発信する表現である見解を得た上で、東洋的インスタレーションの視座を獲得した。その成果は東洋的インスタレーションだからできる、総合芸術として建築を含む環境の在り方を探求する可能性を開いた。

研究成果の概要（英文）：I compared with Installation Arts and Japanese and Chinese classical gardens both of which express the space. I studied through the literature surveys, the field surveys of classical gardens, the interviews of the installation artist and the presentations of the production of the installation art works. I found out that a garden is mixed together time and empty space in the defined space. The viewer himself mirrors his emotion along with minor changes in the garden. On the other hand, as Installation Arts are temporary structures and happenings, the expressions direct to the outside. I gained the viewpoint of oriental installation. And this study leads to the possibility of exploring architecture as arts and environment from the viewpoint of oriental installation works.

研究分野：インスタレーション

キーワード：インスタレーション　園林　庭　芸術祭　中国

１．研究開始当初の背景

インスタレーションは西洋美術の文脈において、近代以降絵画と彫刻の在り方が解体・再構成される中、パフォーマンスやアッサンブラージュ等の要素を取り入れながら、１９６０年代から７０年代にかけて萌芽し、その後も表現としての可能性が摸索されている。

そのインスタレーションが表現するものとは、「コンセプトに基づいて、事物を解体し新たに再構成するプロセスを通じて、眼前の今ここにある状況を見つめ直す空間表現」であり、日本をはじめ中国等東洋美術を背景とする国々でも一般的な美術の表現方法の一つとして認識されている。

しかし一方で、多くの日本人が同じ空間表現でも古典園林や茶室等、伝統的な精神空間の方に親しみを感じ、インスタレーションの西洋的コンセプトの取り扱いと、東洋的精神空間の意識が噛み合わず、鑑賞者のみならず制作者にも戸惑いがあるように見受けられる。その自然な反応として、私自身これまで日本での鑑賞経験や中国にも滞在しながらインスタレーション作品を調査する過程で、日中のインスタレーション作品には、作家の意識の有無に関わらず、古典園林の思想や造形的概念が影響を与えている可能性に着目するようになった。

そうしたことから、本研究「日本・中国のインスタレーション作品に見られる東洋古典園林要素に関する実証的研究」は、日本等東洋美術を背景とする立場から、インスタレーション表現の違和感の正体を明確化し、今後の東洋における空間表現の地平を問う事を背景としてスタートすることになった。

２．研究の目的

これまでインスタレーションは、純粋美術の枠組みの中で語られてきたが、実際表現としてインスタレーションが扱うものは空間そのものであり、建築や環境、社会システムまで人々が創造する全てにおいて挑戦的に試行錯誤し続ける表現であると考えられる。

その中で本研究は、まず園林が人と空間の関係を美的に繋げている事に着目する。東洋的思想や自身の精神が万物に呼応して湧き出る情感が、生命や生き方そのものの在り方を自身に問うことで、それが未だ定義付けがされていない、東洋的視座に立ったインスタレーション作品の見解に繋がることを予想している。

またその先に、「人が環境をどのように感じどのように関わり続けていくのか？」、「自身を取り巻く環境をどう創造していくべきか？」について、その環境自体を摸索し続ける行為としてのインスタレーションの立ち位置を明確にし、その表現としての試行錯誤が環境づくりに活かしていく道筋を作る事が本研究の目的である。

３．研究の方法

(1)調査活動

①文献および展覧会調査

日本国内では橘俊綱『作庭記』、青葉光夫『中国庭園』（誠文堂新光社、1998 年）、吉村貞司『中国絵画を読む』（大日本絵画、1986 年）、飛田範夫『「作庭記」から見た造園』（鹿島出版会 1985 年）、吉村貞司『日本の空間構造』（鹿島出版会、1982 年）等を通じて、日本の園林の受容と独自の発展について、また河本真理『切断の時代−２０世紀におけるコラージュの美学の歴史』（ブリュッケ、2007 年）、白川昌生『日本のダダ』（水声社、2005 年）等を通じて、インスタレーションの萌芽と日本での展開について再確認する。

また中国では、計成『園冶』、楊鴻勲『江南園林論』（中国建築工業出版社、2009 年）、曹林娣『中国園林芸術概論』（中国建築工業出版社、2009 年）、倪琪『園林文化』（中国経済出版界、2013 年）等を通じて、中国における園林の思想的背景とそれを空間として具体化した手法について整理する。

さらに、北京７９８芸術区や今日美術館で行われた現代美術の形式での園林をテーマとした展覧会「假園」等の調査を通してインスタレーションにおける園林的要素の再調査を行う。

②日中の古典園林調査

中国蘇州市（拙政園、獅子林、環秀山荘、網師園、滄浪亭、怡園、芸園、留園）無錫市（蠡園、寄暢園）杭州（三潭印月）日本（桂離宮、大徳寺、後楽園、浜離宮）等の実地調査を通して、文献調査で得た知見を追認すると同時に、多様な空間表現の手法について調査及び記録を行う。

③日中の作家インタビューを通じて、園林的思想がインスタレーション作品にどのような影響を与えているかについての意識調査を行う。

中国人作家（夏小万氏、邵帆氏、管懐賓氏）庭園研究者（中央美術学院丁圓教授、韓文強講師）日本人作家（川井昭夫氏、山本基氏）

(2)実践的な制作研究

調査活動から得た園林と、インスタレーションの知見を統合した表現の在り方を、実際の展覧会の場を活用した制作研究を行う。展覧会は美術館やギャラリー等のホワイトキューブではなく、古民家等多様な大きさと素材が混在した空間において、その空間の在り方や機能を読み替えることで、園林的な時間と空間を渾然一体化させた領域を作り出し、その領域を園林的インスタレーションとして制作する。

(3)報告書の作成

西洋美術におけるインスタレーションの萌芽と日本への影響、及び日中の古典園林の在

り方とその空間的な仕組みを文献と調査記録から紐解くことで、東洋におけるインスタレーションの可能性を園林の精神的背景から求め直し、その答えの一端を実践的制作によって証明する。また完成した作品の構造や思想を詳細に分析して、日中２カ国語の報告書を作成する。

４．研究成果
(1)文献や展覧会、園林、作家へのインタビュー調査の整理から得た研究成果

主に３-(1)-①、②、③の活動によって、園林は五感の総体によって体感する総合芸術であり、鑑賞者と取り巻く物質がおのおのに付着する時間と空間から解放され、神仙思想や洞天思想、風水思想に基づきながら、再構成された時間と空間であるとの見解を得た。その中で鑑賞者は、その時間と空間が渾然一体化した「無」の境地から生まれる情感を堪能しており、そうした空間と鑑賞者の関係が東洋的インスタレーションに繋がるものと考えられるようになった。下記①から③は、その空間性について整理したものである。

① 森羅万象を貫く精神的支柱（宇宙直感）を感じながらも同時に、些細な変化に身を浸して自身の心情を解放させる空間
② 鑑賞者の紆余曲折する人生観と共鳴する空間。
③ 「気」に内包される造形力によって形づけられ、冲気によって「高度な調和の美」が作られている空間。

また、その構造的な仕組みを、次の４点に集約し、パネル展示（金沢美術工芸大学・清華大学美術学院交流展 2015 年）を行った。

④ 空間と時間の操作
「小中見大」「有限中無限」「陽陰和調」「静中有動、直中有曲」等、矛盾するものが矛盾した状態で調和している状態や形体。

⑤ 素材や機能の扱い
山、水、石、建築物、植物、動物等を用いて「山環抱水、山水相依」等、山と水は互いに頼り合う関係にあることや、「水無淵源」水に根源がない事が表現されている。また、多種多様な石が築山や橋、歩道等に使われる中、代表的な太湖石は「瘦・漏・透・皺」の特徴がある石が好まれ、そうした擬人化した考えも見受けられる。鳥や魚は園内の時間の単位を増やし、植物はその在り方一つ一つに自身の在り方を投影したりするものとして機能している。また建物は、「庁」、「堂」、「館」、「軒」、「斎」、「楼」、「閣」、「台」、「亭」など、それぞれの形や環境ごとに過ごし方があり、園林風景と密接に関わっている。

⑥ 絵画的手法
「詩情画意」の画の中に詩情を、園林の中に絵画的美しさを入れ込むことを意識して、その視点として、「平遠」の見下ろす視点、「深遠」の重ね合わせ奥行きを感じる視点、「高遠」の仰ぎ見る３つの視点「三遠の法」と「闊遠」の池泉の向こうの近くの岸が遠くに見える光景、「迷遠」の煙霧が立ちこめている光景、「幽遠」の幽玄的で見えない光景を加えた「六遠」として、西洋絵画的なパースペクティブで設定される時間と空間の規定から解放された絵画の在り方を園林は具現化している。
また構図においても「框景」洞門や窓等隙間を額とした構図、「漏景」花窓と呼ばれる欄間のようなフレームから漏れる風景等の絵画的フレーミングの手法も活用されている。

⑦ インスタレーション的手法
「「精在体宜」「巧于因借」の場所や状況に応じて、大きさや距離、角度、方位等の調和を図って事物の配置が行われている。「障景」は障害物で奥等を見せない事、「仰景」は空間を広く感じさせる事、「対景」は池の向こう等の築山など対になる景色、「引景」は視点の移動と框景を組み合わせて風景が遠ざかって見える仕組み等、事物と空間の創造的な調和を体現している。
また「正中求変」に見られる建物を直線上に配置しながらも、見える景色は臨機応変に変化を与える等、園林全体の事物の配置や見え方の妙理についても探求されている。

（２）実践研究（作品）としての成果

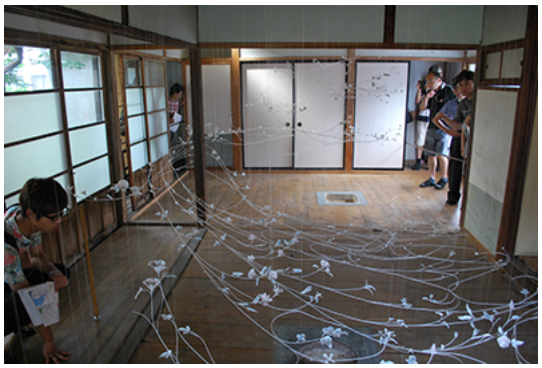
①作品『夜の手触り』2015
（越後妻有アートトリエンナーレ・新潟県）

園林が３６５日２４時間自身の感情を寄り添わせる空間であることから、真夜中（丑三つ時）の園林の情感を磁器の連なりで表現した。地中と地上が闇で繋がり、オオバコ、ハコベ、オヒシバ等が根と茎、葉が繋がって浮遊している。

②作品『順雨庭園』（京都）2016

古民家の畳の上にガラスと陶磁器で出来た植生による原っぱに例えた空間を作成。ガラスは雨粒を、磁器で作られた植物はわずかな衝撃で割れる命の儚さをなぞらえている。畳は床ではなく、椅子やベッドであり茶会では皿にもなる何にでも変わる「無」の空間であり、視点を固定しないで磁器の園林と障子の奥に見える実際の植生と「框景」「漏景」の要素を組み合わせながら堪能できる園林的インスタレーション作品。

③作品『北アルプス高瀬川庭園』
（北アルプス国際芸術祭　長野県）2017



本研究の実践部分の中心となる成果である。古民家全体を回遊的園林として、押し入れを洞門、階段を築山等に例えて作品化した。旅行図的な山水画に見られる神仙思想における山河を登る画題を参考に、展覧会地域に置ける自生する２８種類の植生を高度別に再現し、磁器による河川を作り上げた。
「山環抱水、山水相依」を基に、磁器の連なりは山のようにも河のようにも見ることができる。

また、最上流部からは「水無淵源」の考えから光が天上から差し込む作りになっている。鑑賞者は山水画の中の園林を散策するように下流から上流に歩を進め、洞門を越えて崑崙的な楽園に到達出来る。
さらに多様な照明を天井裏等に設置し、反射光等も扱いながら光が室内に光量をコントロールすることで「陽陰和調」や、草花の中に生息する昆虫類を釉薬で描く事で「小中見大」の世界を体感出来る園林となっている。

④作品『手の中の園林-雨園-』『-曲河園-』
（薪技芸展・東京/上海）2016, 2017

園林の持つ「小中見大」の世界観を「手の中の園林」として制作したもの。
それぞれが手のひらサイズの大きさで磁器によって制作されている。

(5)報告書
西洋におけるインスタレーションの歴史的背景と、日中における園林の在り方について確認した後、ロザリンド・クラウスの「展開された場における彫刻」の引用から、園林とアースワーク、コンディショナルアートの差異と共通点を明確にした上で、東洋的インスタレーションの方向性について、調査分析と実践的な制作の２つの側面から日中２カ国語でまとめている。
その中でインスタレーションと園林の違いは、インスタレーションが眼前の事物に加え、社会の在り方すら見つめ直す美的装置として社会に繋がっている事に対し、園林は外界から断絶して、自身の有り様や情感に深く入り込んでいく。またその表現方法においても、インスタレーションは一般的にハプニングや仮設性といった短時間（固定された時間）の表現に対し、園林は移り行く季節の変化等長い時間を内包する表現である。
以上本研究はインスタレーションと園林が真逆の方向性を持っている事を理解した上で、歴史的に双方が建築を含む総合芸術的視点を獲得していった経緯を踏まえ、その行き先について、生活環境における様々な表層や出来事をも総合芸術として捉え、「高度に調和を取れた美」を目指していくことの必要性について述べて締めくくりとしている。

５．主な発表論文等
（研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線）

〔雑誌論文〕（計０件）

〔学会発表〕（計４件）
① 高橋治希　「夜の手触り」大地の芸術祭（越後妻有アートトリエンナーレ 2015）
② 高橋治希「手の中の園林-雨園-」（薪技芸 2016）
③ 高橋治希「北アルプス高瀬川庭園」北アルプス国際芸術祭　2017
④ 高橋治希「手の中の園林-曲河園-」（薪技芸 2017）

〔図書〕（計１件）
高橋治希『日本・中国のインスタレーション作品に見られる東洋古典園林要素に関する実証的研究』2018　75

〔その他〕
下記雑誌、新聞等に掲載された。
① OZ magazine 8 月号 No.520
女子のための「大地の芸術祭　越後妻有アートトリエンナーレ 2015」ガイド p.82 p.86
② 大地の芸術祭越後妻有アートトリエンナーレ 2015 地球環境時代のアート
現代企画室 p.76
③ 京都新聞　2016 年 9 月 24 日
（第 48338 号 ）市民版 P.20
④ 北アルプス国際芸術祭 2017 ～信濃大町食とアートの廻廊～水・木・土・空～
現代企画室 p.12,p.75

ホームページ等
http://www7b.biglobe.ne.jp/~haruki-t/

６．研究組織
(1)研究代表者
高橋　治希（TAKAHASHI,Haruki）
金沢美術工芸大学・美術工芸学部・准教授
研究者番号　10464554